

前奏 黙想	祈 禱
讚美歌 95 わが心は あまつ神を	讚美歌 II-124 マリヤはあゆみぬ
祈 禱	献 金
信仰告白 使徒信条 566	讚 詠 547 いまささぐるそなえものを
聖 書 創世記 3:4~7	黙 禱
ルカによる福音書 1:26~31	主の祈り 564
讚美歌 96 エサイの根より	頌 栄 540 みめぐみあふるる
説 教 『 恐れるな、もう恐れない 』	祝 禱 後 奏

降誕に際し、マタイ福音書では父ヨセフが八面六臂に働き、ルカ福音書では母マリアの姿が丹念に描かれる。両者に共通する言葉が「恐れるな(マタイ 1:20, 1:30)」。天使はまた「神は我々と共におられる(マタイ 1:23)」と語り、「主があなたと共におられる(ルカ 1:28)」とも告げている。「恐れるな」という言葉でマリアとヨセフは己が枠を踏み超えていく。元来人間は恐れから、一定の枠に自らを押し込めて安定を図る。岡本太郎はそんな枠を壊すために、徹底的に、ユーモラスに自らを「爆発」させ続けた。

人間の本質を言い当てた原初の物語。禁断の実を食べて「賢く」なった男と女。「二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした(創世 3:7)」。創造されたままの自分を隠し合う人間。神に呼ばれても(3:9)、裸という真の姿に怯え「恐ろしくなり(3:10)」神から隠れる。さらにまた、神から離れることで、人間同士は恐れて隠し合うことになる。

天使はマリアに「主があなたと共におられる(ルカ 1:28)」と告げ、「恐れるな(1:30)」と語った。「いちじくの葉で腰を覆う」がごとくに隠れる人間の枠を、マリアは、主が共におられるゆえに、恐れなくて超えていく。クリスマス、神が共におられるからこそ、不可解な神の計画にも身をもって応える。

「天使ガブリエルは、ナザレというガリラヤの町に(1:26)、ヨセフという人のいいなずけであるおとめのところに神から遣わされた(1:27)」。現代では聖地旅行の目的地の一つになっているが、「ナザレから何か良いものが出るだろうか(ヨハネ 1:46)」と言われるほど凡庸な田舎町。神はそんな由緒も聖性もない町を降誕告知の場とした。マリアも聖母として過剰に崇められているが、本当の姿は素朴で貧しい土臭い庶民少女だ。長じたイエスから冷やかに扱われることでも分る(マルコ 3:33~35)。降誕に関わる場所も、人も、神が選んだ。無名で、無力で、取るに足らぬものを選び、そこから降誕が開かれる。

ナザレやマリアを貶めているわけではない。何でもない所に、何でもない人に、誰も注意を払わない聖性とは程遠い所で降誕は告げられた。神がなさった奇跡の本筋を見誤らないためにも、ナザレは寂しい田舎町のままであってほしい。観光客向けの土産物などない町で。マリアは土臭い少女のまま神の子を宿してほしい。典雅な聖画や像に惑わされず、福音書通りにマリアを思い描いてほしい。

八ヶ岳教会はどうか。伝統がないことにかけては一番、一致団結して何かを為す習慣も制約もない。だが、そうした「何でもない」所で福音は鮮やかに告げられる。私たちのほぼすべてが無力で無名、世の中や他教会への影響力などほとんどない。そういう無力な者を神は選んで用い給う。どうだろうか。凡庸な町ナザレの、土臭いマリアに起こった降誕の告知が、自分事のように感じられるだろうか。

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる(ルカ 1:28)」。何が「おめでとう」なのか。あざかり知らぬ懐胎(1:34)が告げられて混乱するばかり。しかし「主が共にいて」、「恐れるな(1:30)」という御告げを身に受けたマリア。彼女は夫となるヨセフ共々、それまでの自分の枠を踏み超えて歩み出す。降誕を担う使命は過酷であっても、彼らは「いちじくの葉をつづり合わせて自らを覆う(創世 3:7)」ことのない、神が共におられる真の命を生きる。「恐れるな」という言葉だけでは少し足りない。「インマヌエル=神は我々と共におられる(マタイ 1:23)」がゆえに、私たちも自らの枠を踏み超える。

「恐れるな」の言葉は鍵かけた扉を叩く音 解錠し少し開くと「インマヌエル」の聖霊が吹き込む風

に吹かれ 人は扉を開けて部屋を出るだろう 外部に対してではない私自身を閉じ込めていた扉

礼拝堂・集会所の住所：408-0012 山梨県北杜市高根町箕輪 2265-3

連絡・問い合わせは牧師へ：408-0205 北杜市明野町浅尾新田 1324 TEL 0551-25-4008

メール komechan.olive@orange.zero.jp HPは「日本基督教団八ヶ岳教会」で検索して下さい。